

『開目抄』に明示される本門戒の諸相(下)

―本門戒壇の戒・定・慧の実義等分類への試論―

大本山本圀寺現燈 早川日章

はじめに

悪人成仏の説話は十界互具の思想を支える重要な柱の一つである。宗祖は『開目抄』で「提婆達多は一闡提なり。天王如来と記せらる。涅槃經四十卷の現証此の品にあり。」と法華經提婆達多品の極悪人提婆達多の成仏を取り上げ、悪人成仏の現証とされた。宗祖の佐渡においての戒壇理論を検証する筆者として、このことについて改めて検討を試みた。

仏は、大勢の菩薩及び天人・四衆に対し「求法に燃える国王が奴僕の如き弟子となり、仙人の阿私仙が良き師と成って修行が進み、遂に国王は大法を得て成仏した」との話をされた上で「その時の国王は仏の自分で、その時の仙人は今の提婆達多であり、提婆はその功勞により天王如来になった」と師弟の本地を明かされた。以上が説話の梗概である。さて、この説話に対する解釈は一樣である。経面には「三千塵点劫の昔、阿私仙に依って教えを受けた国王が成道でき、その功により阿私仙は天王如来となった」「その時の国王は仏である自分で、その時の仙人は今の提婆達多である」と明確である。しかし、経には提婆達多に関しての説明は何等無い。しかし「提婆達多是極悪人である」との仏教通念を当てはめ「極悪人が如来にまでなった。この一事を以て、悪人は皆成仏をする」と結論付けている次第である。これは経面に添った素直な解釈であり、何等問題は無いとされている。

ところで、宗祖は我々の如きと同様に、通念による解釈をなされたのか。否、殊更に、「提婆達多は一闡提なり」と、何故強調なされたのだろうか。前述の通りに宗祖の佐渡においての戒壇理論を検証している筆者には改めて幾つかの疑問が生じている。

先ず、『提婆達多品』には提婆達多は極悪人であるとは一言も解説されていないのである。それにも関わらず、我々は「提婆達多是極悪人である」との通念

を以てこれに宛て、前述の「悪人成仏」という結論を導き出している。しかし、推定の根拠をいわゆる通念のみに頼って、安易に結論を導いていて良いのであろうか。これでは始めから結論有りきではなからうかと、自省の念を持って深く顧みるのである。

加えて、経文の前後を幾ら探しても、阿私仙の身には非道、犯罪、悪人、罪人、悪業、謗法、などの罪人が関わる文字は全く見当たらず、反って、勝れた法華の指導者に見えるのみである。その為に、何故、この説話が、宗祖が示される「悪人成仏の現証」と成り得るのか、とあらぬ疑問が湧く。即ち、善人成仏説を唱え兼ねないのである。

善良な人でさえなかなか成仏出来ないというに、悪人がそれ程簡単に成仏出来るとは信じ難い。常不輕菩薩を輕賤して阿鼻地獄に堕ちた多勢の比丘、比丘尼達は二百億劫という長期間に亘って大苦悩を受けて罪を償ったという。では、提婆達多はどうであったのか。極悪人に相応しい懺悔や悔悛の誓い等が全く語られない成仏論では、宗祖が特に嫌った浄土系の悪人正機説と同一化してしまうのではなからうか。悪を呵責しない、悪業を懺悔もせず、兎に角、一切を弥陀に委ねれば、悪人は悪人のままで往生成仏できるといふのである。これに対する法華の即身成仏、一念三千の即身成仏とは、如何なることであるのか。

そこで、提婆達多品の該当部分の説話の組み立てや流れ等を整理しつつ再検討してみることにした。右顧左眄、検証の結果、遂に、経上には全く隠されている師弟の修行の場の状況は本当のところはどうであったのかと、そこに初めて思いが行き着いたとき、筆者の混乱する思考が急展開し始めたのである。

先ず、経上で阿私仙が妙法蓮華經を宣説すると約束したことが語られています。然しながら、弟子への指導法や、日々、何を、どのように教えたか、それらの経過が全く述べられていない。然るに、阿私仙が成仏し、天王如来になったと語られる。つまりは、説話の中の重要部分が中抜きされているのは、何故なのか。

更に、阿私仙が実は今の提婆達多であったと、仏からの正体明かしが、説話の最後にされるのは、どういうことなのか。単なる正体明かしでは無く、み仏がそのことで何かを暗示しているように思われるのである。

次に、国王については、師を求めて何故、殊更に四方に宣令されたのか。阿私仙が応募することを待っていたためか。また、奴僕に徹して阿私仙に仕え、所須や野で採れるものを全部を師にお供えしたと記されるが、何故、国王たる者がそれ程までして仕えたのか。

また、弟子から見た阿私仙はどのような師匠であったのか。み仏は当初から阿私仙の正体を見抜いていたにも拘わらず。詳細が語られていないのは何故なのか。最後に、国王がみ仏であったという説話の組立には、筋書きを逆転するような、複層的で、逆説的な何かを、ほとけが意図しているように思われるのである。更に、最も把握したい師弟間の交流、教えの遣り取りなどについては弟子の献身以外に全く説明が無く、空白で闇に閉ざされている。その闇の中では一体どの身以外に全く説明が無く、空白で闇に閉ざされている。ような展開があったのか(闇と言っても暗闇でなく、健康的で精神向上の期間)。さて、説話の最後に

「時の仙人とは今の提婆達多是れなり。提婆達多が善知識に由るが故に我れをして六波羅蜜慈悲 喜捨 三十二相 八十種好 紫磨金色 十力 四無所畏 四摂 法十八不共 神通 道力を具足せしめたり。」

と、経は述べているが、これら全てはみほとけの完成された教えの集積であって、阿私仙如きが教えられ得るレベルの事柄では無いように思われる。

以上のことから、提婆達多がどのようにして善知識に成れたかを知るためには、文底に隠される、その闇の中の真相に立ち入るしかないと思われるのである。それは仏が阿私仙の心の内に、如何にして密入し、渦巻く悪念を捉えていったか、ということである。

様々に想像できるそこでの真相が、実は、宗祖が強調される悪人成仏の現証そのもの(現実に顕われた事実)に拠る証明であると拝解され、加えて、提婆品の文底に秘された本門戒壇とその様相が顕れ出したように感じられ、後述の通り、これは正しく本門戒壇の実義を物語る説話であると、自分なりに感得した次第です。

二十二、悪人成仏は本門戒壇の円慧の実義なり

「提婆達多は一闍提なり。天王如来と記せらる。涅槃經四十卷の現証此の品に

あり。善星・阿闍世等の無量の五逆謗法の者、一をあげ頭をあげ、万をおさめ枝をしたがう。一切五逆・七逆・謗法・闍提、天王如来にあらわれた。毒藥変じて甘呂となる。(中略)今法華經の時こそ、女人成仏の時悲母の成仏顕れ、達多悪人成仏の時慈父の仏顕るれ。」(『開目抄』 池上朝夕調誦 三三三頁)

後の項の女人成仏と異なり、悪人成仏を論理的に理解することは難しい。それは倫理的な課題であるからだ。「我が所説の經典は無量千万億にして、已に説き、今説き、當に説かん。而も其の中に於て此の法華經は最も為れ難信難解なり」と法師品に仏が述べておられる。以前の私は、提婆達多品の悪人成仏説は何の疑いもない説話であった。ところが、開目抄に取り組むことになった私には提婆達多品はその難信難解の最たることの一つになった。前書きの通りである。

さて、国王の高らかな呼び掛けに、生きたまま無間地獄におちた極悪人が応じる資格は無い。有るとすれば、阿私仙の仮面と隠された悪へのたくらみとである。然るに何故、国王である仏は阿私仙である提婆達多を師匠に迎え、奴僕として仕えることにしたのか。

み仏が最後になって阿私仙の正体を明かしたことは、実は最初から分かっていたということである。であれば、み仏は提婆達多に自分への復讐の絶好の機会を何故、与えたのか。

また、提婆達多にとってみれば、かつて弟子の阿闍世王が唆しに乗って、三逆罪を犯したように、力ある国王を同様に育て上げて一大戦力にすれば、必ずや仏に危害を加えられるものと密かに考えて、募集に応じたものと推定できる。

さて、師弟での修行が始まると、表面上は兎も角、両者の内面は果てしなき暗闘と葛藤のつぼであったと思われる。阿私仙なる提婆達多の心中は、燃え上る嫉妬と報復への業火に包まれ、弟子となった国王を極悪の徒に導こうとし、国王は弟子の身において、提婆達多を善人に導こうと苦闘していたに違いない。

一方では「大王に白して言さく。我大乘をたもてり。妙法蓮華經と名けたてまつる。もし我に違わずんば、まさに為に、宣説すべし」と約束し、信用を取り付けた手前、最高の師匠らしく振る舞わなければならない。しかも、影響力

のある国王がわが弟子となったのであるから、秘めた企みはさて置き、うわべは誠実に法華経を説かねばならない。釈尊に嫉妬し、亡き者にしようと狙い続ける提婆達多のこと、仏の手の内は相当に知り尽くしている積りである。最強の謗法者に仕立て上げよう。

それからの日々は、不本意ながらも、良きほとけの六波羅蜜 慈悲 喜捨 三十二相 八十種好 紫磨金色 十力 四無所 四攝法、十八不共、神通、道力などの教えのまがいもの如きを、何も知らぬ弟子に具足させる為と、あらゆる手立てを駆使していったであろう。弟子の国王は奴僕のようにどこまでも師匠を立て、無心に敬い続ける。それは仏の万民救済への慈悲の顕われである。仏の万能の力に叶う者は無い。阿私仙なる提婆達多は始めに密かに抱いていた悪への誘惑の指導をするどころか、千歳を経て、いつしか、法華経に染められて善人になり、遂に、善知識になってしまったのである。つまり、ミイラとりがミイラとなったのである。

思うに、すべてはみほとけの手の内にあり、あらゆる変化はみほとけの広大な慈悲の致すところで、良薬によって毒が制されたのである。

阿私仙こと提婆達多の苦闘は不純な欲望から発し、偽芝居ごとき指導がいつしか浄化され、遂に懺悔を経て誓願へと進展したことを物語る。まさに、慈悲と救済、懺悔と誓願とは事の戒壇と戒壇の様相そのものの顕現である。このことを宗祖は、自らの罪業観と照らし合わせ、この経の文底を喝破され「毒藥変じて甘呂となる」(再掲)『開目抄』池上朝夕諷誦三三三頁と述べられたものである。

かくして、毒藥がどのように良薬へと変化してゆくか、深き文底へいざなわれて、悪人成仏の現証をこのようにご教示なされたものと拝解するものである。

筆者の脚色は或いは妥当性を欠くかも知れませんが、このように解釈すれば、毒藥変じて甘呂と成るように、提婆達多は善人となって法華成仏できたのだと、私なりに納得できるのです。よって、悪人成仏は現前の本門戒壇の円慧の実義なり、と留めたい。

二十三、女人成仏は本門戒壇の円慧の実義なり

「総じて迹門正宗分の八品は、二乗作佛の特記を説示し、中にも迹門流通の法師品は善人成仏を示し、宝塔品は、成仏の理相を示し、本(提婆多品は、悪人・女人・畜趣・地獄の成仏を説示す。故に法師、宝塔は理性の即身成仏説示、当提婆多品は、事相の即身成仏説示なり。)(『法華文句口決』巻四 国書刊行会)

「法華経の現文を拝見するに舍利弗華光如来、迦葉光明如来、須菩提名相如来、迦旃延闍浮那提金光如来、目連多摩羅跋耆檀香佛、富樓那法明如来、阿難山海慧自在通王仏、羅睺羅跢七宝華如来、五百・七百普明如来、学・無学二千人宝相如来、摩訶波闍波提比丘尼・耶輸陀羅比丘尼等は一切衆生喜見如来・具足千万光相如来等なり。」(『開目抄』池上朝夕諷誦二九〇頁)

法華経「勸持品」で佛は、佛の姨母摩訶波闍波提比丘尼は大法師に、学・無学の二千人の比丘尼は法師になり、将来の世には皆共に一切衆生喜見如来と成ること、また羅睺羅の母、耶輸陀羅比丘尼は大法師となり、善国の中に於いて具足千万光相如来と成ること、等を預言する。宗祖は女人成仏を意図してこの経文を引用したのではないが、姨母・妻以外にも六千人の比丘尼、女人の成仏を述べていられる。

「竜女が成仏此一人にはあらず。一切の女人の成仏をあらわす。法華経已然の諸小乗経には女人成仏をゆるさず。諸大乘経には成仏往生をゆるすようなれども、或改転の成仏一念三千の成仏にあらざれば、有名無実の成仏往生なり。挙一例諸と申て竜女成仏は末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし。」(『開目抄』池上朝夕諷誦三三三頁)

宗祖が女人の成仏往生を強調される理由は、法華教學的には一念三千の平等思想から打ち出されてくるが、現象学的には宗祖を支えた大勢の女性信者ととの人間的な交流が齎したものであろう。男性優位の社会に於いては性差による偏見が潜在し、宗教界にも浸透して爾前経での比丘尼に対する比丘尼の地位は低く抑えこまれ、女人禁制、女人不成仏の風潮が漂い続けた。大乗経にあっては女性に男に改転し、長い修行を経た後に、成仏できるとされ、即身成仏ではない。宗祖を師と仰ぎ、法華信心の誠を尽くす人は、たとえ女性であっても、どのような機根の状態であれ、そのときの在りのままに即身成仏するのである。

そして、この場合の成仏とは死して後だけで無く、生存のままに成仏すること

とをも示唆しているのである。

数々の法難での弾圧は他面では非人間的な差別を受けたことを意味する。宗祖は恐らくこの受けた差別感情を厳しい他宗批判に変え、他方では、弱い立場の人々、殊に女性達への無限の労わりと導きとに誠意を尽くされた、とも言えるのである。

「華嚴宗と真言宗とは本は権経・権宗なり。善無畏三藏・金剛智三藏、天台の一念三千の義を盗とて自宗の肝心とし、其上に印と真言とを加て超過の心をおこす。」（『開目抄』 池上朝夕諷誦 二八九頁）

「而を華嚴・法相・三論・真言・念仏等の翳眼の輩、彼々の経々と法華経とは同とうちおもえるは、つたなき眼なるべし。」（『開目抄』 池上朝夕諷誦 二九六頁）

齒に衣を着せない露骨で厳しい他宗批判は本抄には随所に見られる。宗祖のこうした鋭く切り裂くが如き孤高の論陣を誰しも崩すことは出来ない。かくして、女性に対する平等かつ大慧の理念は正に、本門戒壇円慧の核心の実義となるのではなからうか。

二十四、六難九易を行ずるは本門戒壇の円戒の実義なり

「日蓮云、日本に仏法わたりてすでに七百余年、但伝教大師一人計法華経をよめりと申すをば諸人これを用ず。但法華経云、若し須弥を接て他方の無數の仏土に擲け置かんも未だ為れ難しとせず。乃至、若し仏滅後の惡世の中に於て、能く此の経を説かん、是れ則ち為れ難し等云云。日蓮が強義経文には普賢台せり。」（『開目抄』 池上朝夕諷誦 二九六頁）

伝教大師さまが法華経の実践をなされたのに弟子達は誰ひとり跡を継がなかった。それは、見宝塔品の六難九易の経文に示される通り、五種法師（ここでは解説の行）が簡単そうに見えて実は、九易を超える難行であるからだ。そのことは、宗祖が自らの弘法活動を経て、強く表明するところである。

「日本国に此をしれる者但日蓮一人なり。これを一言も申出すならば、父母・兄弟・師匠国王の王難必來べし。いわずば慈悲なきにいたりと思惟するに、法華経・涅槃経等に此二辺を合見るに、いわずは今生は事なくとも後生は必無間地獄に墮べし。いうならば三障四魔必競起るべしとしぬ。二辺の中には

いうべし。王難等出来の時は退転すべくは一度の思止べし、と且やすらいし程に、宝塔品の六難九易これなり。我等程の小力の者須弥山はなぐとも、我等程の無通の者乾草を負て劫火にはやけずとも、我等程の無智の者恒沙の経々をばよみおぼうとも、法華経は一句一偈末代に持がたしとかるるはこれこれなるべし。今度強盛の菩提心をおこして退転せじと願しぬ。」（『開目抄』 池上朝夕諷誦 三〇二頁）

前文と同様に、法華経の一句、一偈を信じ持つことの至難なことが幾つかの九易を例に挙げて述べられている。そして、更に次のことを論じられている。

「日蓮は諸経の勝劣をしること、華嚴澄觀・三論嘉祥・法相慈恩・真言の弘法にすぐれたり。天台・伝教の跡をしるのぶゆえなり。彼の人々は天台・伝教に帰せさせ給わずば謗法の失脱させ給べしや。当世日本国に第一に智者は日蓮なるべし。命は法華経にたてまつる。名をば後代に留べし。大海の主となれば諸河神皆したかう。須弥山の王に諸山神したかわざるべしや。法華経の六難九易を弁れば一切経よまさるにしたがうべし。」（『開目抄』 池上朝夕諷誦 三三二頁）

私日蓮は、天台・伝教大師さまの立派な行跡を敬い頂くゆえに、これほど満ち足りている者は他に誰もいないであろう。その上、このいのちを法華経に捧げ尽くし、六難九易を行じているので、河神山神もすべて私と共に法華経を信持するであろう、と断言される。

宗祖は五種法師の行の険しいことを闡明され、また六難九易を理解するならば、余経を一切読まずに、法華経一途でも良いと教示されておられる。これらはすべて宗祖ご自身の弘法体験から滲み出るところ、まさに本懐である。宗祖から約八百年、現代では五種法師は楽行と思いがちだが、実は困難な行であることを今更ながら思い知らされる。

天台・伝教大師の三学を継承され、その上にご自身の困難な弘教を通じて体得し具現せられた本門の三学は本抄に溢れん程に満ち満ちている。それら一つ一つが宗祖の筆舌し難い、いのちの苦闘がもたらした膨大なものである。宗祖がご自身を語る言葉の端々すべてに宗祖の強い息遣いを感じない者はいないであろう。本抄はそれほどまでに宗祖の素顔と人格と行跡等とを浮き彫りにしている。まさに宗祖の戒定慧が躍動しているのである。慧と定を知れば戒はその

側面に混在しているのである。三学が相即しているのである。換言すれば、宗祖の三学（戒定慧）とは、帰するところ、宗祖の上行としての人格そのものである。自身が守り続ける戒については、なかなか自分から言い得ないのが通常であらう。

かくして私たちは、本抄が唯一の書であるがゆえに、宗祖ご自身がご自身の本門戒の全貌を如実に宣明されておられると確信するのであります。宗祖が六難九易・五種法師を行ぜられたことは、私たち法の血の通う者の指針としなければならぬことである。宗祖に殉じることは私たちが最高の富者となることである。ゆえに、六難九易を弁え、五種法師を行じることが本門戒壇の円戒の実義と定めなければならないであらう。

二十五、行者への神の加護は本門戒壇の円定の実義なり

「今末法の始二百余年なり。『況滅度後』のしるしに闘諍の序となるべきゆえに非理を前として、濁世のしるしに召合せられずして流罪乃至寿におよぼんとするなり。されば日蓮が法華経の智解は、天台・伝教には千万が一分も及事なけれども、難を忍び慈悲のすぐれたる事おそれをもいだきぬべし。定て天の御計にもあづかるべしと存ずれども、一分のしるしもなし。いよいよ重科に沈還て此事計みれば、我身の法華経の行者にあらざるか。又諸天善神の国をすてて去給るか。かたがた疑わし（中略）今の世の僧等日蓮を譏奏して流罪せずば此経文むなし。」（『開目抄』 池上朝夕諷誦 三〇五頁）

本門流通分で法華経行者への加護を誓う諸仏諸菩薩・諸天善神が本経に多数現れる。ところが、宗祖ご自身は難を受け、流罪乃至寿（いのち）に及ばんとした事実は、どうしたことか。否、この事実こそが、法華経が真実の教えであることの証明なのだ。

「但世間の疑いといい、自心の疑と申、いかでか天扶給さるらん。諸天等の守護神は仏前の御誓言あり。法華経の行者には、さるになるとも法華経の行者とごうして、早々に仏前の御誓言をとげんとこそおぼすべきに、其義なきは我身法華経の行者にあらざるか。此疑は此書肝心、一期の大事なれば、処々に此れをかく上、疑を強くして答をかまうべし」（『開目抄』 池上朝夕諷誦 三〇六頁）

宗祖はここに至って、本書の執筆目的が「神の加護無きは、我身法華経の行者にあらざるか」にある、と述べられる。法華経には三類の強敵が難を加えることと行者を守護する神々の存在とが説かれている。であるならば、なぜ、大難を繰り返し受けなければならなかったのか。謗法の日本国から神々は去ってしまった為と言っているのか。

この問いの本質をみつめると、その先に、澄み切った法華経の最高の救済の世界のあることが予感される。誰も経験したことのない法難と生死を分ける極限状況、その彼方に、宗祖がまもなく『本尊抄』で辿り着く広大な永遠のおしえの世界が開けているのである。

「予、事の由をおし計に、華嚴・觀経・大日経等をよみ修行する人をば、その経々の仏・菩薩・天等守護し給らん。疑あるべからず。但日経・觀経等をよむ行者等、法華経の行者に敵対をなさば、彼の行者をすてて法華経の行者を守護すべし。（中略）法華経の諸仏・菩薩・十羅刹女、日蓮を守護し給上、浄土宗の六万諸仏・二十五菩薩、真言宗の千二百等、七宗の諸尊、守護の善神、日蓮を守護し給べし。例せば七宗の守護神伝教大師をまほり給しがごとしとおもう。（『開目抄』 池上朝夕諷誦 三四頁）

それぞれの他宗の人々はそれぞれの神仏に護られ、法華経を信じる宗祖も法華経の神仏に守護されている。また、七宗の守護神が伝教大師を守るように、それらの神仏は私を守ってくださると述べられる。いま、筆者は、宗祖はご自身のこのころの内に広がりつつある救済の世界を私達に垣間見せてくださっている、と思う。それは宗祖が、「神々の守護は平等であり、神性がすべての人に平等に降り注ぐ新しい世界」へと歩み入られ、折伏にこだわり続けた半生から重大な転換を計るということである。

「日蓮案云く、法華経の二処三会の座にませまし日月等の諸天は、法華経の行者出来せば磁石の鉄を吸がごとく、月の水に遷がごとく、須臾に来て行者に代、仏前の御誓をはたさせ給べしとこそおぼえ候に、いままで日蓮をとぶらい給わぬは、日蓮法華経の行者にあらざるか。されば重て経文を勸て我身にあてて身の失をしるべし。」（『開目抄』 池上朝夕諷誦 三三五頁）

信念の殻を破り、新しい世界へ一歩踏み出す前に、もう一度確認しておきたい。神仏の守護を頂けない自分には何か失があったのではなからうか、と。

「我無始よりこのかた、惡王と生て、法華經の行者の衣食田畠等を奪とりせしことかずしらず。当世日本国の諸人の法華經の山寺をたうすがごとし。法華經の行者の頸を刎こと其數をしらず。此等の重罪はたせるもあり、いまだはたさざるもあるらん。果も余残いまだつきず。生死を離時は必此重罪をけしはてて出離すべし。功德は浅軽なり。此等の罪は深重なり。（中略）今ま日蓮強盛に国土の謗法を責れば大難の来は過去の重罪の今生の護法に招出せるなるべし。」（『開目抄』 池上朝夕諷誦 三三六頁）

ここには苦吟する宗祖の、余りにも深刻な前世の業が述べられている。余りにももったいないお言葉である。しかし、これは宗祖一人だけの特異な業で無く、我々もそのような業の一分を持っていると拝解すべきである。後述するように、宗祖はこの『開目抄』において、龍口での死と引き換えに得られた新たな眼を以てご自分を徹底的に省みられ、その一切を述べられておられる。まさに、心の目を開くの抄である。宗祖は新しい魂魄へと生まれ変わり、そして一段高い精神の世界へと向かわれたのである。（詳細は次号の『観心本尊抄』に明示される本門戒壇）で述べる予定である）

二十六、授受・折伏行は本門戒壇の円戒の表裏なり

「西方に仏図という者あり、聖人なりといいて、外典を仏法の初門となせしこれなり礼樂等を教て、内典わたらば戒・定・慧をしりやすからさんがため、王臣を教て尊卑をさだめ、父母を教て孝高きことをしらしめ、師匠を教て帰依をしらしむ。」（『開目抄』 池上朝夕諷誦 二八五頁）

授受とはどのような行為を指しているのだろうか。この文章中の「戒・定・慧をしりやすからさんがために」とは或いは、内典授受への準備段階を指すようにも思われる。王臣の尊卑、父母の孝高きこと、師匠への帰依等を教える事は道徳である。儒教創始者の孔子が道徳を仏図（仏陀）の仏法の初門であり、戒・定・慧を知るための素地であると説いていることは、授受を考える上で参考となる。何故ならば、授受のみならず折伏も指導方法の分野における方法論の一種であるからである。

「而に法華經の第五の卷勸持品の二十行の偈は、日蓮だにも此国に生ずは、ほとんど世尊は大妄語の人、八十万億那由陀の菩薩は提婆が虚証罪にも堕ぬべ

し。經に云く「有諸無智人、惡口罵罵等」「加刀杖瓦石」等云々。今の世を見るに、日蓮より外の諸僧、たれの人か」（『開目抄』 池上朝夕諷誦 三〇五頁）
折伏とはどのような行為を指しているのだろうか。『開目抄』のこの文中の勸持品の二十行の偈を色読し、実行することを我々は天台・伝教・宗祖の説に基いて、折伏と呼んでいる。とりわけ、折伏は宗祖の代名詞である。

「我一門の者のためにしする。他人は信ぜざれば逆縁なるべし。一滴をなめて大海のしおをしり、一華を見て春を推せよ。万里をわたる宋に入らずとも、三箇年を経て靈山にいたらずとも、竜樹のごとく竜宮に入らずとも、無著菩薩のごとく弥勒菩薩にあわずとも、二処三会に値ずとも、一代の勝劣はこれをしれるなるべし。」（『開目抄』 池上朝夕諷誦 三三二頁）

宗祖は一代の勝劣を知ったならば、如何なるものにも目を向けず、猪突猛進することを折伏といい、これを我一門の者のためにしするすと宣言される。

「当世日本国に第一に富者は日蓮なるべし。命は法華經にたてまつる。名をば後代に留べし」（『開目抄』 池上朝夕諷誦 三三頁）

宗祖は命を法華經に奉り、折伏を貫いているゆえ、日本国の第一の富者であると言われる。

「日蓮といひし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ。此は魂魄佐土の国にいたりて、返年の二月雪中にしるして、有縁の弟子へおくれば、おそろしくおそろしからず。みんないかにおぢずらん。此は釈迦・多宝・十方の諸仏の、未来日本国当世をうつし給明鏡なり。かたみともみるべし。」（『開目抄』 池上朝夕諷誦 三三三頁）

いまこの『開目抄』は魂魄となつて執筆している。折伏は命とひき代えになるほどに厳しく、激しい行為である。法華經に数々の受難のあることは明白にうたわれ、ご自身は色読と折伏とで繰り返し受難してきた。この事を、宗祖は自身の受難が法華經の真实性を実証していると再三に亘って宣べておられる。受難は折伏の証明であり、折伏は法華經の真实性を証明し、法華經は受難を予証している。宗祖は法華經・折伏・法難のトライアングルの中で、戒・定・慧の不撓の法城を造り続けられた。しかし、佐渡流罪を機に、多くの弟子・信者は離れてしまい、いまやその法城は崩壊の瀬戸際にあった。その三角形の堅固な囲いの中にいるだけでは広布に限界が見え、帰妙は行き詰まるばかりであ

る。佐渡流罪は宗祖に対し、根本的な変更を追っていたのである。

宗祖は佐渡流罪まで、様々に折伏活動を続けてこられたが、本抄の最後になつて摂受、折伏を改めて整理されておられる。内、二・三ヶ所引用すると、

「止観云、夫れ仏に面説あり。一には摂、二には折。安樂行に不称長短という如き、是れ摂の義。大經に刀杖を執持し、乃至、首を斬れという、是れ折の義。与奪途を殊にすと雖も、俱に利益せしむ」(『開目抄』池上朝夕諷誦三四八頁)

「涅槃經云、仏法を壊乱するは仏法の中の怨なり。慈無くして詐わり親しむは是れ彼が怨なり。能く糾治せん者は是れ護法の声聞、真の我が弟子なり。彼が為に悪を除くは即ち是れ彼が親なり。能く呵責する者は是れ我が弟子。駈遣せざらん者は仏法の中の怨なり」(『開目抄』池上朝夕諷誦三五〇頁)

大經に仏法を守るためならば、刀杖を執持し、時には首を斬つても良い、折伏とは暴力を伴うものであると説かれる。これに対し、宗祖の折伏は素手であり、当然に暴力は全く伴わない。常不輕菩薩の如く、受難するばかりである。慈無くして詐わるようなことも無く、ひたすら糾治し、悪を除き、呵責し、駐遣するのみである。

「夫摂受・折伏と申法門は水火のごとし。火は水をいとう。水は火をにくむ。摂受の者は折伏をわらう。折伏の者は摂受をかなしむ。無智悪人の国土に充滿の時は摂受を前とす。安樂行品のごとし。邪智謗法の者の多時は折伏を前とす。常不輕品のごとし。譬えば熱時に寒水を用、寒時に火をこのむのごとし。草木は日輪の眷属、寒月に苦をう。諸水は月輪の所従、熱時に本性を失。末法に摂受・折伏あるべし。所謂悪国・破法の領国あるべきゆえなり。日本国当世は悪国か破法の国かとするべし。」(『開目抄』池上朝夕諷誦三四九頁)

宗祖は摂受・折伏に関しては先に引用した涅槃經、或いはその解釈をした止観・弘決・文句。涅槃經疏等に論拠を置いているが、この引用文はご自身の論である。目立つことは摂受と折伏とを正反対の対極に置き、夫々を行う時期・状況を定めていることである。本来は摂受と折伏とは方法論における強・弱・浅・深の關係にあるが、宗祖は好き・嫌いの、水・火の対極關係にあると考えられている。無智悪人には摂受、邪智謗法には折伏という方法が適切であると述べるが、無智と邪智、悪人と謗法の対比に宗祖の思想の特徴が表れる。前者は白

と黒の対比であり、邪智には折伏が要であることは自明である。悪人と謗法の対比はねじれの關係にある。謗法には折伏、これは宗祖の法華經色読によるものと拝解する。時期・状況については、末法には摂受・折伏の両方が必要で、日本国が今、悪国か破法の国かを正確に判断し、摂・折のいづれかを選ばねばならないとする。

「若し、悪人有つて不善の心を以て一切の中に於て現に仏前に於て常に仏を毀罵せんは其の罪尚輕し。若し一人の惡言を以て在家出家の法華經を誦誦する者を毀罵せんは其の罪甚だ重し。」(法師品第十)

右の引用文と同様の内容の經文は相当数が見られる。仏前で仏を毀罵する悪人よりも、法華經を誦誦する者を毀罵する謗法の方が遙かに罪は重いと説く。法華經には時期・状況の指示はないので、宗祖の時代は破法の国であつたと理解する。では、末法の現代日本は悪国か破法の国か、どちらであろうか。

宗祖は混乱の社会で、謗法の諸宗に折伏を加え、更に、幕府に対しても捨て身の諫曉を二度も行ったのである。この為、各宗の僧俗から何度も襲撃を受け、政權からの無残な弾圧と断罪とを受難したのである。法華經の三類の強敵を熟知している宗祖のこと、真の法華行者為らん、と当然の如く行動を起こしたに違いない。それほどまでに、宗祖は法華經を拠り所とする無二の法華經の申し子であつた。

さて、現代の布教方法を考える場合、摂受・折伏の両方が必要であるのか。の日本は鎌倉時代とは国の制度はあらゆる面で全く異なる。また諸宗の教義等においても随分と変化をとげている。例えば念仏系は捨開闢の教義を捨てているようだ。また、本宗に於いても随分と変更があるようだ。各宗を調べ直す必要を思う。

「日蓮が流罪は今生小苦なればなげかしからず。後生には大樂をうくべければ、大に悦し。」(『開目抄』池上朝夕諷誦三五二頁)

宗祖の『開目抄』はここで擱筆された。

最後のこの一文は自己の身のことのみを述べただけでない。捨ておかれての厳しい環境、未だ迫りくる身の危険、その中で書き終えた安堵感が伝わる。勿論、戦いはまだ続くから新たな準備を始めようとの意気軒高な息遣いさえも聞こえる。

さて、佐渡流罪を受け止めて書かれた本抄は、五重相對、四種三段により本門の教相を明確にして宗祖が折伏行の原根拠を闡明した。次に、折伏による法難はなぜ起きるのか、折伏を行なう法華行者に神の加護が見えないのは何故か、と赤裸々に問い、その経証と法難が必然であることを明証し、最後に、諸宗の神々までもが法華行者を守護することを確信すると述べるに至った。いずれも、折伏を行ずる宗祖が末法の大導師、如来使であることを証明するに足るものである。

宗祖の流類である私たちは宗祖の「末法に摂受・折伏あるべし」とのご遺訓を学問上ではなく、布教上の方法論として具体的に再検討すべきと思う。本門戒壇はその基点になる所であり、建立の早期実現への興論を期待したい。

二十七、三天誓願の日本の柱は本門戒壇の円定の実義なり

二十八、三天誓願の日本の眼目は本門戒壇の円戒の実義なり

二十九、三天誓願の日本の大船は本門戒壇の円慧の実義なり

「詮ずる處は、天もすて給へ、諸難にもあへ、身命を期とせん。身子が六十劫の菩薩の行を退せし、乞眼の婆羅門の責を堪へざるゆえ。久遠大通の者の三五の塵をふる、悪知識に値ふゆえなり。善に付け悪につけ、法華經をすつるは地獄の業なるべし。本願を立てん。日本国の位をゆづらむ、法華經をすてて觀經等について後生をこそよ。父母の頸を刎ねん、念仏申さずは。なんどの種々の大難出来すとも、智者に我が義やぶられずば用ひじとなり。其の外の大難、風の前の塵なるべし。我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん等と誓ひし願、やぶるべからず。（『開目抄』池上朝夕諷誦三四五頁）

要するに天から見捨てられようが、諸難に値おうが、命のある限り法華經の修行に精進しよう。舍利弗が六十劫という長い間、菩薩の行を積みながら、成仏できずに退いてしまったのは乞眼の婆羅門から肉眼を強要され、その責苦に堪えきれなかったからである。

法華經の本門で五百億塵点劫の昔に、あるいは、迹門で三千塵点劫の昔の大通仏の時に釈尊から成仏の種を下された者達が靈鷲山で釈尊が教えを説かれるまで、生死の苦海に輪廻していたのは悪知識に会って法華經を捨てたからであ

る。たとえば、どんな事情があろうとも、法華經を捨てることは最悪のことである。

私(日蓮)はここに大願を立てよう。日本国の位を譲る代わりに法華經を捨てて觀無量壽經を信じて後生を願えと強要されても、念仏を唱えぬと父母を殺すぞと脅されても、あるいはそのような酷い仕打ちを受けようとも、智者に我が主張の根本を破られない限り、断固と従うことはない。その他の大難なども風前の塵に過ぎない。我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならんと誓ひは、如何に強要されても破ることは有り得ない。

ここでの日本の柱は主の徳、眼目は師の徳、大船は親の徳を意味するとされるが、筆者の考えは異なり、法華經本門を基盤に「日本仏教を支える」「日本仏教を統合する」「日本仏教を牽引する」と夫々に解釈するものである。理由は、末法であっても三徳兼備の本仏は久遠実成の釈迦牟尼仏であり、上行菩薩は如来使であること。まして、宗祖が世俗的な日本国の主に成ろうというのではなく、宗教では最高位、仏教では最上位たる法華經中の、三大事の、主たる担い手に成ろう、と誓われたものと想定したい。

従い、この三天誓願は本抄執筆と期を同じくして、宗祖の胸中に胎動を始めた三大秘法の構想に大きな影響を与えたものと推定する。即ち、柱は本尊、眼目は戒壇、大船は題目へと適当させるならば、宗祖が後に建立宣言する三大秘法の、その源流、もしくは原思想になり得る。そうなれば、三天誓願の真の意味・価値が改めて評価し直されるのである。

かくして、三天誓願は私たちに本門戒壇の建立を要請している。宗祖の誓いは、必然的に、私たちの誓いを要請している。宗祖が「先頭の担い手になろう」と言われるならば、私たちは「手伝います」「手伝わなければならない」などと誓願と義務(本門戒)を発露しなければならぬ。その中心、基点となるものは本門の戒壇であり、その本門戒壇には三天誓願の宗祖日蓮大聖人(上行菩薩)の影現を仰ぐものである。

《むすび》

宗祖の考える本門戒は何か、何かお書きになっていないかと『開目抄』を拝読して来て拙いながら、判明したことがある。それは、得てして誰もがそうで

あるように、自分が理解したこと、考えたこと、出した結論などについては言葉や文字などで表明するものであるが、自分の人品や人格などについて語ることには誰もが躊躇しがちである。

『開目抄』における宗祖もまた然りで、多くの仏典に通じた、折伏を為した、三大誓願を披瀝したなどということについては、虚心坦懐、率直に述べておられながら、ご自分の人品や人格に関することは殆ど語っていない。そこで、宗祖は戒や戒壇について何も述べなかった、という通説が一般的になってしまった。

私達は宗祖に関して、極めて勇気がある、雄々しい、忍耐強い、緻密で、率直で、気がつく、鋭い、優しい、誠実で、達文達筆で、細やかな、などと敬虔な気持ちを込めてその品性や人格を表現している。しかし、何故そのような人格を磨き上げているかについては論じていない。概ね上行菩薩への自覚という「人開顕」の視点から見ているに過ぎない。

しかし、宗祖は佐渡在島中および身延入山直後にも、本門の戒壇を建立したと明言している。それは本門戒の一定の、或いは膨大な内容の確立を意味しているはずであり、同時に宗祖の人格が完成に近づいたことも併せ意味している。

この拙い小論があげた本門戒壇の戒定慧は適切に表現したとは言いが、宗祖の人格を考察して導き出したものと自認するものです。大方のご批判をぜひ賜りたく切望いたします。

(了)

伊藤瑞叡日慈猊下に感謝して

現實首 早川日章

本圀寺生御影堂の前に立つと、私は立ち去り難い感情にいつも捉われる。この小庵のとびらから漏れ来る、尊きあまたのみ声に耳を澄ますのだ。

・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

意志強きそのお方と片腕撃たれし愛弟子との会話は

いまも、さらさらとながれているでしょうか

生命惜しまぬそのお方とみさお逞しきもののふとの語らひは

いまも、遼々と響き渡っているのでしょうか

教え深きそのお方と法論挑みし真言者との対話は

いまもごうごうとどろき渡っているのでしょうか

蘇生祈るそのお方とうち伏す病者とのいのりの共鳴は

いまも、ぱちぱちと囲炉裏の音を立てているのでしょうか

志し高きそのお方と宗派改めしご坊らとの言の葉は

いまも、藹々と温かく湧き出でているのでしょうか

導き熱きそのお方の幼き弟子にのり説く御声は

いまも、萌えい出る鼓動となって伝わって来るのでしょうか

秘法湧くそのお方と浴するみ弟子の唱題は

いまも、あしたも凛々とひびき続けるのでしょうか

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

生御影堂は百四世沙羅院瑞叡日慈猊下が教鞭を執られた大学の退職金を建築費に充てられて、平成二十七年に完成されました。生御影堂とは、鎌倉松葉ヶ谷草庵の大聖人の小客殿兼居室である。大黒院日朗菩薩建立大聖人みずからが開眼された大聖人ご尊像が正義本尊として奉安されている。

※本稿は「本圀寺報」第九号（令和七年六月二十七日）一一九頁より抜粋したものである。